

肉用牛の現状と 振興方向



本県の畜産は、広大な阿蘇高原地帯等の恵まれた自然条件を生かしながら、近年、着実な発展を示し、全国でも有数の畜産県として位置付けられており、畜産物の安定供給に努めています。

県農政部推計の、昭和五十五年度畜産粗生産額は、九百九十四億円で、農業総

生産額の二八％を占め、年々、そのウェイトは高まり、畜産は本県農業の基幹作物として、今後ますますその発展が期待されています。

しかしながら、最近におけるめまぐるしい経済社会情勢の変化の中で、畜産を取りまく内外の諸情勢は、配合飼料価格

の値下り等経営環境の好転により、牛肉を除く生乳、豚肉等の畜産物にあっては、生産が需要を上回る伸びを示し需給上の不均衡という新たな問題が生じており、需要に見合った計画生産が実施される等厳しいものがあります。

さきに、国が公表した昭和六十五年度を目標とした「農産物の需要と長期見通し」によれば、国民所得の向上や生活の多様化が進むことから、畜産物の需要、なかでも牛肉は食品の中で、最も高い伸びを見通しており、この需要に対応して生産も大幅な増加を見込み、畜産、特に肉用牛に対する期待は今後更に増大するものと考えられますので、需要に即した安定的な供給体制を整備促進する必要があります。

そこで、本県農業の基幹作物と目される肉用牛を国民食肉の安定的な供給基地として、更にその位置づけを向上させるとともに生産性の高い肉用牛経営を確立するため、本県肉用牛の現況、今後の展望について、「農産物の需要と長期見通し」、「八十年代熊本県総合計画」及びこれ等にかかわる振興方向等総合的な見地からその概要について申し述べます。

表1 畜産粗生産額の推移 (単位:億円,%)

区分	農業粗生産額	畜産粗生産額	肉用牛	割合	
				畜産粗生産額	肉用牛
50	2,961	708	161	23.9	22.7
53	3,540	932	231	26.3	24.8
54	3,605	972	247	27.0	25.4
55	3,500	994	259	28.4	26.1

資料) 農林水産省「生産農業所得統計」農政部推計(55年)

表2 熊本県肉用牛飼養戸数・頭数の推移 (単位:頭)

区分	年	50	53	54	55
飼養戸数	飼養戸数	24,400	22,600	21,700	20,900
	飼養頭数	107,000	113,000	120,500	121,200
2才以上めす	飼養頭数	42,000	45,900	46,700	46,000
	乳用種	16,000	19,000	25,300	25,900
1戸当りの平均飼養頭数		4.4	5.5	5.6	5.8

資料) 農林水産省「畜産統計」

肉用牛の飼養動向

本県の肉用牛の飼養頭数は、五十年には十万七千頭であったが、肉用牛の生産振興、経営安定のための積極的な施策や経済の安定化に伴って、価格及び生産条件の回復が進んだこと等により、五十一年には十一万六千頭に増加しましたが、その後、輸入牛肉問題を契機に子牛価格が低迷したこと等により、五十三年には増加したことに伴って、五十年には十一万三千頭とやや減少しました。

しかし、五十三年後半から子牛や枝肉価格が高い水準で推移したこと、配合飼料価格が比較的安定化したことと最近肥育仕向けに乳用種の増加等もあって、五十四年以降緩やかではあるが増加傾向にあり、五十五年には十二万一千二百頭となっております。

なお、二歳以上の肉専用種については、五十三年以降四万六千頭前後と伸び悩みの状態にあり、今後、牛肉生産の拡大を図るためには、いかに和牛の生産振興を図るかが重要な課題です。

一方、乳用種は、五十二年以降増加基調にあります。特に五十四年から生乳の生産調整の影響、肥育意欲の向上等もあって乳用種の肥育

仕向けがさらに増加し、五十四年及び五十五年には二万五千頭台となり、肉用飼養頭数の二一％を占めています。

飼養戸数は、一〜二頭の零細規模を中心に引き続き減少を続けていますが、最近、地力維持のための堆きゅう肥の再評価、景気後退に伴う兼業機会の減少あるいは水田利用再編対策による農業経営形態の変化等もあって、年率一〜四％程度と鈍化の傾向にあります。

この結果、一戸当たり飼養頭数は、年々微増はしているものの未だ零細で五十五年は五、八頭となっています。

肉用牛経営のうち、肉専用種の繁殖経営については、零細経営が大部分を占め、規模拡大のテンポは緩慢であります。草資源に恵まれた地域においては、多頭飼養経営が増加しています。

一方、肥育経営については、比較的規模拡大を進めやすい部門であることから繁殖経営に比べると規模拡大は順調に進んでいます。

以上のように、乳用種飼養頭数が大きく伸びてきたのは、牛肉需要の増大を背景に乳用おす肥育技術が確立されてきたこと、乳用おす肥育素牛の入手が比較的容易であったこと、更に、購入飼料に依存することにより規模拡大が相対的に容易であったこと等によるものです。

一方、肉専用種の飼養頭数が伸び悩みにあるのは、生産の基礎部門である繁殖経営の規模拡大等が進まなかったことが大きな要因となっています。その背景には、粗飼料の確保等土地利用の面で制約が大きいこと、拡大再生産を行うと

する場合かなりの期間と資金を要すること、過去、子牛価格が不安定であったこと、更には収益性が低かったこと等があげられます。

飼養頭数を地域別に見ますと、繁殖牛については、広域農業開発事業等の草蘇高草原地域と粗飼料生産基盤に比較恵まれている球磨地域の比重が高く、この二地域で県下の六〇％を占めています。最近では天草地域の占める割合も増加傾向にあります。

肥育牛については、配合飼料による多頭化が容易なこともあって、都市近郊や平坦地域のウエイトも高まってきました。最近では畜産環境問題等で産地が畑地帯や山間地帯へと移行しており、肥育地帯としては菊池地域(二八％)、阿蘇地域(一九％)、球磨地域(一〇％)の比重が高いが、近年は阿蘇地域の増加が著しいものがあります。

なお、本県では肉用牛の飼養品種としてあか牛が六五％、乳用種が二五％、天草の黒牛が八％程度飼養されています。

子牛と肉牛の生産・流通の動き

一、肉用子牛

県内で生産された肉用子牛は、県下十四の家畜市場でほとんど上場取引されていますが、子牛の出荷頭数は、四十九年後半から子牛価格が大幅に下落することにも繁殖めすのと殺が増加したため、五十年以降の子牛価格が高値で推移した

にもかかわらず、子牛生産に先行不安の思わくから五十四年には三万六千五百頭と前年より四％減少しました。

子牛の出荷先については見ますと、五十四年には出荷量の五〇％に当たる一万五千二百九十六頭が県内に保留され、県外には五〇％に当たる一万五千三百六十頭が福岡県、静岡県をはじめ、全国各地に移出されています。

二、肉牛

肉牛の出荷頭数は、需要の伸びと並行して増加してきましたが、四十八年には二万五千七百三十九頭と前年比で三四％と大幅に減少しました。その後は増加に転じ、五十三年には五万七千五百六十二頭と前年比で三〇％増加しましたが、五十四年には生乳の生産調整による低能力牛の肉用化の促進に伴い、乳用めす牛が前年に比べて二一％増加したものの、生産者の保留意欲の高まりから和牛めすが前年比で一八％減少したこと等により、肉牛全体では五万一千二百八十二頭と前年比で一〇％減少しました。

これを種類別に見ると、和牛が四四％の二万二千九百八十六頭(めす和牛二二％、去勢及びおす和牛二二％)、乳用種は五六％の二万八千二百九十六頭(肥育おす牛三二％、乳用めす牛二四％)となっております。

また、五十四年の肉牛出荷頭数のうち、四一％の二万九百八十八頭が県内の食肉流通施設でと殺解体され、五九％の三万三千七百七十四頭が県外の消費地に生体で出荷されています。

なお、県内における肉牛の処理は、五

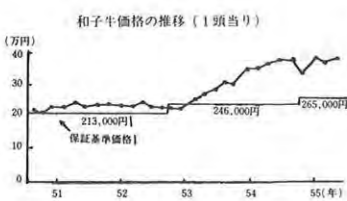


表3 肉用子牛と肉牛の流通 (単位:頭)

区分	年	50	52	53	54
肉用子牛出荷頭数	県内	34,128	33,219	31,967	30,656
	県外	18,134	17,894	16,162	15,296
肉牛出荷頭数	県内	15,994	15,325	15,805	15,360
	県外	49,544	55,890	57,562	51,282
1戸当りの平均飼養頭数	県内	20,966	23,205	27,003	20,908
	県外	28,578	32,775	30,559	30,374

資料) 農林水産省「食肉流通統計」県畜産課「家畜市場成績」

十四年の県内処理頭数のうち、熊本県畜産流通センターが二八％、熊本市食肉センターが二一％及びその他の地方のと畜場が一％となっており、枝肉及び部分肉で県内あるいは県外の大消費地に出荷されています。

価格の動き

一、肉用子牛の価格

和子牛の価格は、牛肉の需給及び価格の変動等に大きく左右され、五十年後半から緩やかな上昇を続け、五十二年から五十二年にかけて二十三万円から二十四万円台で推移しましたが、五十三年に入ってから肉輸入枠の拡大に対する先行不安の思わくや枝肉価格の値下り等の影響を受け、二十三万円台まで値下りしました。しかし、その後、枝肉価格の回復や肉用子牛の需要が増加したことにより、年々、急速に上昇し、五十四年の年平均では三十四万八千